

『原爆文学事典』構想について

川口隆行

古いものをなかなか捨てられません。片付け下手です。ですが、先日思うところもあって、幾本かのUSBのデータを整理・削除しました。今となつては、不要なものがほとんどですが、大切に寝かせていたものもあります。いや、時おり思い出しつつ、あえて見過ごしていたというべきでしょうか。「原爆文学事典案」というファイルがそうです。最終更新は二〇〇三年二月二十九日一八時三五分。

『原爆文学事典』を作ろうと提案したのは、やはり花田俊典さんでした。詳しいいきさつは忘れませんでした。最初に話があったのは、原爆文学研究会の活動が徐々に軌道に乗ってきた、二〇〇三年の夏ごろだったでしょうか。研究会本体の企画というよりは、まずは何人かで構想を練り上げ、それが固まった段階で、研究会内外の方々に執筆協力をお願いするという段取りでした。第一次構想の中心を任されたのは、私や中野和典さんといった、当時二〇代後半から三〇代前半の面々でした。花田さんは、若者に大役を任せることで、少し背伸びするよう促したかったのかもしれない。つまらないと彼が思うプランが提出されてもしたら、すぐさ

ま叩き返したかもしれない。いずれにせよ今となつては、花田さん自身がこの企画についてどこまで何を考えていたのか、もはや知る余地はありません。

その頃は私も台湾に住んでいましたから、メールでの意見交換が中心でした。特に急ぐわけでもなく、ぐずぐずと第一次案を作りあぐねているうちに、花田さんが急逝、いつのまにか事典の話は立ち消えとなりました。ちょうど同じ時期に、ジョン・W・トリートの『グラウンド・ゼロ』を書く、日本文学と原爆』の邦訳という、これまた大変な共同作業に参加したこともあって、そちらにエネルギーを傾けねばならないという事情もありました。そしてなにより、今から思えば——あくまでも私個人についてですが——構想を実現させるために必要な力量と見識を備えていなかったことが最大の原因であつたと認めざるを得ません。事典を編むということの意味さえも、あまりわかかっていなかったと思います。

あれからちょうど十年が経ちます。私もとうに不惑を過ぎました。遅々とした歩みには忸怩たる思いもありますが、時間の積み重ねは全く無駄であつたわけでもなく、ようやく自分なりに見えてきた地平もあります。なにより研究のネットワークは格段に広がりました。これまでに知り合つた多くの方々との協力も仰ぎ、『原爆文学事典』構想を再起動させる時期が来たのではないかと考えるようになりました。少々話が脱線しますが、最近、七〇年前後の長岡弘芳さんや彼が中心となつた原爆文献を読む会の活動について調べ直しています。そのことについてはいずれきちんとまとめるつもりですが、長岡さんの記念碑的労作『原爆文学史』が四一歳の時の作品であることを思い出すたびに、いまの私は励ま

れてなりません。

さて、当然のことですが、USBから発見されたファイルの内容は、そのままではほとんど使い物にはなりません。研究状況はもとよりそれを取巻く社会環境も大きく変わりました。「原爆文学」と言いながら、今では、「原爆文学」や「核の平和利用」に関する事象についても、何らかの形で含めざるを得ないでしょう。そもそも、そうした事柄が私たちに問題として見えてこなかった歴史自体を問わねばなりません。「文学」にやはりこだわりのながらも、関連諸領域を取り込んだ文化的、社会的な取り組みにもなる予感がします。あるいは、対象とする地理的もしくは時間的範囲についても、「戦後日本」を超えるかもしれません。規模も内容も具体的構想を練り直すのはこれからです。名称にせよ、あくまでも仮のものに過ぎません。頒価一万円を超える大部なもの

のとなるか、もう少しハンディなガイドブックみたいなものになるのかも、現時点ではまったく見当もつきません。インターネットでの公開という手も考えられないわけではないと思います。

ですが、いずれにせよ目標として掲げたいのは、これまで原爆文学とされてきた内容を精緻化すると同時に、原爆文学の枠組みそれ自体を意識的に更新する「事典」です。核・原爆に関わる文学的文化的事象の膨大な歴史的堆積を集積・検証することによって、現代を生きる私たちの諸問題を新たに発見しえるような、将来の人たちがさまざまな局面で思考する際の手引きとなるような「事典」を作ってみたいのです。自分の首を絞める宣言に思うのですが、ワクワクドキドキする気持ちも抑えられません。じつくり腰を据えねばとうてい実現できないでしょう。一方で、できるだけ急がねばとも思う、そんな今日この頃です。